

プロジェクトマネジメント国際会議ProMAC2004開催。 日本IBMからも、多くの社員が参加。

プロジェクトマネジメント学会は、2004年10月11日(月)~14日(木)の4日間にわたり、千葉・幕張メッセ国際会議場にてPM(プロジェクトマネジメント)の国際会議ProMAC2004を開催。世界中から多くの参加者を集めて、国内におけるPM関連の会議としては、発表件数・参加者数ともに最大規模の大会となりました。

本大会には、PMの推進に熱心な日本アイ・ビー・エム株式会社(以下、日本IBM)からも多数の参加者があり、20名以上の社員が論文発表を行いました。

ProMAC2004運営委員として大会運営をお手伝いさせていただいた日本IBM サービス事業 ストラテジー&コンピテンシーの原田 奈美と、同 木野 泰伸が、盛況だった大会の様子を報告します。

大盛況となったProMAC2004

ProMACは2002年7月にシンガポールで開催された第1回大会に続き、今回が2回目となります。今会議はPM学会主催、Nanyang Technological University(南洋工科大学・シンガポール)、Tsinghua University(清華大学・中国)共催で開かれ、アジア/太平洋地域を中心に10カ国以上から、

800名を超える参加者を集め、PMが世界中で注目されていることをあらためて示しました。

スペシャルセッションやキーノートスピーチには、日本IBM 取締役専務執行役員 富永 章や米国IBM ディスティングイッシュトエンジニア ジェームズ・ランボーをはじめ、PM分野における各国の著名人が、それぞれの立場から自らの取り組みの紹介や、PMの最新動向の解説を行いました。

また論文発表では、プロジェクトマネジャーや研究者が、現場におけるPMの状況や導入事例、研究成果、教育方法などについて、130編を超える論文を発表しました。これらの内容はいずれもPM学会の審査を通った高水準かつ最新の情報であり、参加者は今後の取り組みの参考にするために熱心に聴き入っていました。

論文発表や運営協力に 日本IBM社員が活躍

ProMAC2004には、日本IBMおよび各国IBMからも多数の社員が参加し、日本IBMの社員が約20編、各国IBMの社員が約10編の論文発表を行いました。また、PM学会からの依頼を受けて、日本IBMから何人かの運営委員を派遣し、大会運営をお手伝いさせていただきました。

今大会に限らず、日本IBMでは、全社的な技術力アップやエンジニア一人ひとりのスキル向上のために、PM学会や情報処理学会をはじめとする各種学会での社員の活動を奨励しています。

日本IBM 理事 神庭 弘年は、社員の学会活動について「今回の国際大会



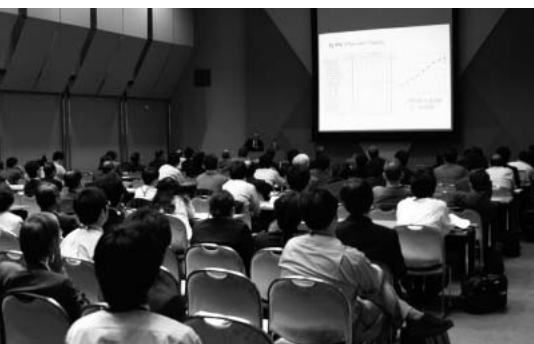
会場風景



については、日本IBMとしてもさまざまな形で支援させていただきましたが、それはPMの隆盛を図ることが、この業界全体のレベルを上げるためにも大切であり、また、PM分野におけるリーディングカンパニーとして、学会の活動になんらかの形で貢献したいと考えているからです。日本IBMがそういった支援を行うことで、結果的に業界における日本IBMの存在感を高めまし、参加している社員の技術レベルが上がるからです。

なお、PM学会をはじめとする各種学会への参加は、あくまでも社員の自由意思によるものであり、会社側から参加者への資金援助などは行っていません。自らのスキルを高めることに意欲的な社員が、それぞれ自主的に参加しているのです。

会社側としては、全社的な技術水準を高めるという観点から、業務上の必要性が高いと認められる活動であれば、社員の就業時間中における学会活動を認めるとともに、可能な限りバックアップする体制を取っています」と語っています。



論文発表

運営協力や論文発表に奮闘して、大会期間中は連日1万7000歩を踏破。



日本アイ・ピー・エム株式会社
サービス事業
ストラテジー&コンピテンシー
専任ITアーキテクト
原田 奈美

約1年かけた大会の準備

ProMAC2004では、論文発表に加え、運営側としても協力させていただきました。

大会の1年ほど前から国際委員としてその準備を開始し、大会運営上のさまざまな作業に協力しました。具体的には、基調講演をお願いする方々のリストづくりと依頼に始まり、論文の募集要項であるアナウンスメントづくり、細かいスケジュール調整などです。基本的には毎月開催される委員会、各委員がそれぞれ持ち帰った作業の進捗を報告して意思決定し、再び持ち帰って準備を進めるという繰り返しでした。委員の方々は、当然ながらそれぞれの会社で自分の仕事を抱えていますので、限られた時間で効率的に準備作業をする必要がありました。その調整が最後まで大変でしたが、全員で精

力的に作業を進めることでなんとか間に合わせることができました。また、会期が近づくにつれて新たに解決すべき問題が次々と出てくるなど、国際会議の運営の難しさを実感しました。

ただ、PM学会はIT(Information Technology: 情報技術)関連企業にお勤めの会員の方が多く、委員会を通じて、他社の会員の方々との交流ができたという点では、得るものが大きかったです。

無我夢中で過ごした4日間

大会期間中は、参加者の受け付けを担当したり、会場で使用するために日本IBMから貸し出した10台のPC(Personal Computer)の管理を担当しました。特にPCの管理は、遠く離れた5会場で同時に論文発表が進んだこともあって、会場内を駆け回る忙しさでした。ちょうど社内ではウォーキングキャンペーン中でしたので毎日歩数計を付けていましたが、大会期間中に歩いた距離は連日1万7000歩にもなりました。とにかく目の回る忙しさで、ほかの方たちの論文発表をあまり聞けなかったのは

残念ですが、基調講演だけはなんとかやりくりして聞き逃さないようにしました。

わたし自身の論文発表については、"Practical Approach to Motivation of Team Members -MEH Model for Praise and Reproach-"というタイトルでチームビルディングにおけるモチベーションについて発表しました。国際大会なのですべてが英語で進行するのですが、英語による論文発表が初めてだったこともあり、発表中の20分間は最後まで緊張して、足がぐくぐくと震えていました。

英語による論文発表をはじめ、初めて体験することも多く、無我夢中で過ごした4日間でしたが、この貴重な経験を今後のステップアップに生かしていきたいと思っています。



貴重な経験となった論文発表。2006年シドニー大会にはより多くの方々の参加を。



日本アイ・ピー・エム株式会社
サービス事業
ストラテジー&コンピテンシー
主任ITスペシャリスト
木野 泰伸

多様なテーマで今日のPMに迫る

初日の11日には、一般セッションに先立って5件のスペシャルセッションがありました(表1)。最初の二つのセッションについてその内容を簡単にご紹介します。

最初の講演は、“Essentials seen in the Success—the PM Importance Everywhere—”と題して、当社取締役専務執行役員 富永 章が

行いました。米国や中国におけるロケットの成功事例や、過去の偉大な計画の成功における共通点を洗い出し、現代およびこれからの時代を勝ち抜くのに必要なPMの重要性とその方策について、広い視点からとらえた内容でした。

次に、“The Challenge to Nissan's Revival”と題して、日産自動車株式会社 取締役共同会長 小枝 至氏よ

表1. スペシャルセッション

タイトル	講演者
Essentials seen in the Success –the PM Importance Everywhere–	日本アイ・ピー・エム株式会社 取締役専務執行役員 富永章
The Challenge to Nissan's Revival	日産自動車株式会社 取締役共同会長小枝至氏
Just-in-time Training –Using a Model of Project Results versus Team Enablers to Identify Post– PMP Training	BRAMCN Project Consultants Ltd. Bryan R. McConachy氏
The Role of Project Management in Formation and Performance of Creative-Dynamic Organization	The University of Sydney Ali Jaafari氏
Project Thinking: Changing the Way We Manage Opportunities	IPMA First Assessor Adesh Jain氏

表2. キーノートスピーチ

タイトル	講演者
Where Does Modeling Fit into Project Management	IBM Distinguished Engineer James Rumbaugh
Strategic Delivery Capability –the challenge for project management–	University of Technology, Sydney Lynn Crawford氏
Status and Issues of Project Management in National Development of China	The director of China Development Bank Jilin Provincial Branch Yuan Yinghua氏
Risk and Project Management	Technology Management of INSEAD Arnoud De Meyer氏
Birth of Neutrino Astrophysics	東京大学名誉教授 小柴昌俊氏

り、同社のリバイバルへの取り組みとその様子について力強くお話しいただきました。

2日目以降は、ノーベル物理学賞を受賞した小柴昌俊氏をはじめ、5件の大変興味深いキーノートスピーチ(表2)が行われました。

一般セッションは、五つのトラックに分かれ、各会場で以下に挙げる多様なテーマで発表と意見交換が行われました。

- ・ プロジェクト一般
- ・ PMツール
- ・ IT - ソフトウェアPM
- ・ 生産系プロジェクト
- ・ R&D(Research and Development: 研究開発)プロジェクト

- ・ プロジェクト教育
- ・ 国際プロジェクト
- ・ リスクマネジメント
- ・ アーンドバリューマネジメント
- ・ プロジェクト計画とスケジューリング
- ・ 品質マネジメント
- ・ CMMI®(Capability Maturity Model Integration: 能力成熟度モデル統合) コミュニケーション
- ・ 人的資源マネジメント
- ・ エンタープライズ・プロジェクトマネジメント

次回は2006年にシドニーにて開催

一般セッションにおいて“Personal Risk and Issue Management”のタ



イトルで自分の発表をさせていただきましたが、これは課題懸案事項一覧表を用いた個人レベルでのリスクマネジメントの事例です。

英語があまり得意でないため、当初、国際大会で発表することについて迷いましたが、今回は日本での開催でもあり、この機会に英語での発表を経験することが、今後の仕事にも役立つと考え、決意しました。英語力のある方であれば、始めから英語で執筆されると思うのですが、まず、日本語で予稿集の原稿や発表用資料を作成し、それを翻訳し、さらに英語力のある方に、レビューしていただくという手順を取りました。日本語の発表に比べ、何倍もワークロードの掛かる作業でしたが、大変良い経験になりました。また、発表の準備を行うことにより、日ごろ何となく考えていることをあらためて整理したり、自信の持てないエリアの知識をあらためて調べ直すことができました。

発表後は、日ごろ接することのない他社や海外の方々から、貴重なご意見を伺うことができ、大変、有意義なものとなりました。今回の経験を生かし、今後は良い発表ができるようにしたいと考えています。

なお、次の大会は、2006年にシドニーで開催される予定です。PM学会事務局側の立場から一言いわせていただければ、読者の皆様も、ぜひ次回のProMAC2006にご参加ください。

